

伊藤泰郎・崔博憲編

## 『日本で働く——外国人労働者の視点から』

(松籟社、2021)

五十嵐 泰正 (筑波大学)

政府ははまだ「移民」という言葉を使うことは頑なに避けるものの、これまでもっぱら技能実習生や定住者としてのサイドドアからの外国人労働者を導入してきた日本が、曲がりなりにも労働者として外国人を迎え入れる本格的なフロントドア、在留資格「特定技能」での受け入れが開始された2019年前後には、「労働開国」が大きな社会的話題としてテレビニュースや一般紙誌で取り上げられ、すぐれた書籍も数多く出版された。本書『日本で働く』も、この機に長年の研究成果を社会化しようとしたものだとすることがあとがきに書かれているが、外国人労働者の眼に映る私たちの社会がいかなるものであるのかを突きつける本書は、マジョリティの日本人に突きつけるアクチュアリティと迫力において、同時期の類書の中でも群を抜いている。

まず序章では、外国人労働者が日本社会のどこに編入されて何を担い、彼らの側からは日本がどう見えているのかという本書を貫くコンセプトが示されるとともに、外国人は日本の労働力不足を今後も都合よく埋めてくれる存在なのだろうかという問いがあまりにも欠けてきたという、強烈な問題意識が披瀝される。それに続く本書の序盤では、「特定技能」創設による「フロントドア」の成立および、その後のコロナ禍の影響を受けた最

新の状況まで、第1章では統計的に、第2章では政策的・制度的に、近年の外国人労働者をめぐる動向が丁寧にレビューされ、この問題領域に関する確で過不足ない俯瞰的視座が読者に提供されてゆく。

そうした必要な準備作業を経て、具体的な産業領域に根差し、あるいは興味深い事例研究に基づいた——それが重視される程度は章によって濃淡あるが——議論を展開する以降の各章で、本書の本領は発揮される。なかでも、特定の産業領域における外国人労働を分析した第3章・第4章のうち、技能実習生や東京五輪に向けた緊急措置として、外国人受け入れが拡大する建設業を分析した第4章に対して、食料品製造業という現代日本で拡大し続ける産業領域での外国人労働を深掘りした第3章は、「彼らが私たちの社会で何を担っているのか」を怜悧に剔出した、本書中でも白眉の一つだろう。

飯田悠哉と伊藤泰郎による第3章が特に注目するのは、技能実習生に担われる一次産業と留學生の資格外労働が目立つ小売・飲食業のあいだで拡大を続けているにも拘わらず、これまであまり焦点化されてこなかった、いわゆる「中食」——総業や弁当・サンドイッチの製造過程における外国人労働である。現代日本におけるフードシステム

全体の連鎖を見据え、「食の外部化」という切り口で展開される本章は、食品関連の仕事の中にも外国人労働者にとって日本語能力に応じた「格付け」があることを紹介するなど、その要の位置にある「中食」における外国人労働者の動員のあり方を子細に描き出すことで、これほどまでに「合理化」されないと成り立たない日本の食のあり方は本当にサステナブルなのか、鋭く問い直す視点を提供し得ている。

続く第5章と第6章では、大きな矛盾をはらんだ「サイドドア」からの実質的な外国人労働者として、日本を支えてきた技能実習生を主人公に据えて、彼らの目から見た母国と日本が描かれる。最大の技能実習生送り出し国ベトナム社会の変化を見つめる、川越道子による第5章は、「経済格差ゆえの貧しい国からの出稼ぎ」というステレオタイプ的な見方に、警鐘を鳴らすことから書き起こされる。では、ベトナムから日本に技能実習に行く人々が口々に言う「ここには仕事がない」とは、何を意味しているのか。その背景に、急速に「上から」工業化されていくことで、自給自足経済が崩れていく新興国・ベトナムの農村社会の変化を見出したのは、長らくベトナム社会に溶け込んで暮らした経験のある筆者ならではの慧眼である。帰国後に自営の店を持つことを夢みながらそこまでは果たせない技能実習生たちが、帰国後に不全感を抱えた毎日を送っているのは、評者が90～00年代に元「不法」就労者のパキスタン人をカラチに訪ねた時の光景と重なるが、このような国際移動現象に伴いがちな人々の価値観の変化にも川越は繊細な目を向ける。

タイからの技能実習生を描き出す第6章の崔博憲もまた、消費社会化するタイの農村の人々にある「欲望と所得のギャップ」に、国際移動の駆動力を求める。しかし、1980年代の非正規就労者、90年代の研修生と、それぞれの時代にタイから来ていた労働者の目に映っていた日本と、現代のタイ人技能実習生たちにとっての日本を対比する形で書き進められる本章は、もはや見上げるよう

な存在ではなくなった、渡航先としての日本の価値の下落を強調する。それでもなお、「何事にもお金が必要」になったタイの農村の若者たちは、「欲望と消費のギャップ」を埋めるために、いや、一度の渡航では何ともならないそのギャップを埋め続けるために、もはや日常的な行動の一部として、「単なる渡航先の一つ」となった日本への渡航を繰り返し試みるのだという崔の指摘は重い。

3世まで活動に制限のない定住者として在留資格が与えられている日系人を取り上げるのが、中田英樹の第7章と吉田舞の第8章である。吉田が的確に整理するように、日本の入管政策と資本のニーズに呼応することで1990年以来成り立ってきた日系人労働者という存在は、日本社会において「ジャスト・イン・タイム」で調整可能な、周辺の労働需要を満たしてきた。だからこそ日系人たちは、景気や季節の雇用変動に脆弱で、日本国内での移動も多く（これは職場を移動する自由がない技能実習生とは対照的な困難だ）、非常に不安定な立場に置かれがちだが、そんな中で第8章では、家庭菜園というセーフティネットを構築した日系フィリピン人家族の生き抜く知恵を紹介している。

とはいえ、日系人が定住者というサイドドアから受け入れられるようになった30年の間に、確実に日本社会に、なかでも日本の地方に定着し、その主要な担い手となっている現実があることに注目を促すのが第7章である。滋賀県の過疎地域に移転した日系ブラジル人学校・ラチーノ学院が、地元で生産される米を給食に使うなどの地域との交流によって、「ブラジルの飛び地」のような状態から変化するとともに、お題目的な「多文化共生」とは全く異なる形で衰退する地域の担い手となり、結果として地域自体も大きく変化している——これは、衰退する在日コリアン集住地区で谷富夫（2002）が見出したバイパス結合を想起させる——ことを、中田は生き生きと描写する。外国人の目に映る衰退する日本というのが、本書を貫くテーマの一つでもあるが、この社会が外国

人に「選ばれなくなる」前に、まだ築ける別の未来がありうることを教えてくれる第7章は、本書の中でも最も力強い希望に満ちた章でもある。

こうした各章の合間には、「最後のフロンティア」ミャンマーでの技能実習生送り出しの現場、ベトナム人技能実習生を支援するウェブサイト運営とその挫折の経験、メキシコに進出した日系自動車企業で媒介者として働く元在日日系ペルー人、そして大阪の風俗エステに勤める中国人女性のライフストーリーといった、論文とするには断片的かつ先鋭的な、ただしそれがゆえにさまざまな歪みが集積した事例を紹介するコラム群が差し挟まれ、ハッとさせられる視点をコンパクトかつ効果的に提示している。また、その背景の多様性や日本での在留資格や職種が多岐にわたることから、「見えない」存在になりがちな一方で、地方では「目立つ」がゆえに特段に「品行方正」に振る舞う在日アフリカ人たちを、アフリカ研究者ならではの視点で記述する坂梨健太の第10章も、ややコラム的な性格で新しい視点を提供している。そうした中でも特に、中国・ベトナムに続いて技能実習生送り出し国となった「ミャンマーの次はない」という言葉や、日系自動車会社が集積するパヒオ地区でもはや日本人との間を媒介する職が乏しくなっているというエピソードに、現在の世界における日本のプレゼンスの低下や、「経済大国・日本」に行きたい外国人に依存できていた時代の終わりを、否応なく印象付けられる。

そして、本書を類書から際立った存在にすることに特に貢献しているのが、飯田悠哉による第9章である。「かれらの前には誰がいたのか」と題された本章では、外国人技能実習生の導入以前にさかのぼって、いわゆる高原野菜を生産する高冷地園芸における雇用と労働のあり方が丁寧に記述される。繁閑の季節変動が激しく、農繁期にはきわめて労働強度の高い園芸産地は、常に季節雇を必要とする構造にあり、過疎化の進展で地域内の労働力供給が見込めなくなった1990年代以降は、住み込みの臨時雇を渡り歩く「バイト」に支

えられてきた。そして、2010年代半ば以降こうした産地は、すぐにやめてしまう「あてにならないバイト」ではなく、技能実習生に依存するようになったと飯田は指摘する。技能実習生「以前」から流動的な労働力が不可欠であった農業は、ミャンマーのコラムで垣間見えた技能実習生が来なくなった「後」には、いかにして存続し得るのだろうか。本章の議論は事例分析にとどまるが、農業のみならず、製造業・水産業・流通などさまざまな産業における外国人依存の「前」を顧みること、「後」の持続可能性に真剣に向き合うような、分野横断的かつ包括的な研究の進展に大いに期待したいところだ。

こうした各章で取り上げられた論点を整理したうえで、この社会を支える存在を「移民」と呼ぶことをいまだ拒絶する政府の姿勢の背後にある、経済グローバリゼーションを推進する勢力と排外的な家族的ナショナリストたちとのキメラのような危うい野合を、西澤晃彦が喝破する終章で本書は閉じられる。しかし、本書を読み通してきた読者は、眼前に広がっているはずの現実から目を背ける人々をそんな悠長に慰撫していただけるほど、この社会には余裕がないことを痛感しているだろう。

1980年代よりこのかた、常に「問題」という言葉とともに語られてきた外国人労働者は、豊かな日本に来たがる人々の奔流を国家がどう管理するかという「問題」であることを、暗黙の裡に含意していたわけであるが、もはやそんな前提が成り立つ日本ではないことを、本書の各章やコラムは繰り返し突きつけてきた。さらに先を見据えれば、GDP世界一となるとともに生産年齢人口がピークを越える中国が、本格的な移民受け入れ国となるそう遠くない未来は、世界で最大の人口を抱える国、すなわち世界で最大の市場と労働需要を持つ国が移民受け入れ側になるという、世界史上初めての事態である。それは、日本が移民国家になるのかなどという議論にまどろんでいる間に、もはや移民国家になりたくてもなれなくなる未来でもあるのではないか。

こうしたことまでを読者に想像させる射程を本書が持ちえたことには、二つの理由があるように評者には見受けられる。一つは、人類学・社会学・農学・地域研究と著者たちのディシプリンが多岐にわたっているのみならず、その主たるフィールドも日本にとどまらず、ベトナム、タイ、ラテンアメリカ、アフリカと幅広いがゆえに、いわゆる「(日本の) 外国人労働者問題」プロパーの研究者からは出づらいう多角的な視点が共有されていたこと。そしてもう一つは、おそらくこちらのほうが本質的であるように思われるが、著者たちのほとんどが、日本においては広島もしくは関西圏に研究基盤を置き、厳しい地方のリアリティに日々向き合っているように感じられることである。

課題先進国とも新興衰退国とも言われる、縮小社会化のただなかにある日本の問題は常に地方で先鋭的に発現するが、外国人労働者問題もまた地方問題そのものである。実際に、本書で取り上げられる国内の事例も、広島のカキ養殖、高冷地の園芸産地、滋賀の過疎化する農村、青森のリング農家、埼玉西部の中食商品の工場といった地方を舞台にしているものが大半を占めているが、グローバル資本主義への編入と人口減少という不可逆的な変化の中にある日本の地方で、外国人労働者が求められることには二つの必然性があると整理できる——国際的に比較優位が失われた財を生産する産業を存続させる低待遇で柔軟な労働力として、そして生活を支える移転不可能な財やサービスの供給者として、である。本書では、拙著(2010)や安田浩平(2014)の、「きわめて日本的な光景こそ外国人に支えられている」という言葉が繰り返し引用されるが、地域の経済と歴史を作ってきた一次産業や地場産業への外国人編入パターンは前者にあたるし、介護や中食・建設は後者にあたる。

いずれのパターンでも、いま多くの場所で地域を支える主力になっているのは、移動の自由がないために、低待遇を甘受して「計算できる」労働

力となってくれる技能実習生であるだけに、彼らの問題は地方の持続可能性と直結する難問とならざるを得ない。評者は、南関東のある農業者から聞いた、技能実習生は一度頼りだすと抜け出せない「麻薬」のようなものだという言葉が忘れられないが、たとえば、違法なブローカーが摘発されたかと思えば、一時失踪技能実習生に在留特別許可を要望するといった話題に事欠かないレタス産地の長野県川上村は、「麻薬」を前提とした地域経済が成立してしまっている典型例であろう。

外国人技能実習制度が抱える人権問題を、抜本的に解決する必要があることは言うまでもないし、そもそも技能実習生が「来てくれない」未来もそう遠くないかもしれない。しかしいずれにせよ、ポスト技能実習生の時代に地方の産業と暮らしをどうするのか、さらにはそうした地方から供給される野菜や弁当を支えられてきた(都市部の)人々の暮らしをどうするのか、といった横断的・包括的な視点からの議論と、私たちの意識と暮らしの問い直しを抜きに、切迫する事態に対処することはできない。先にも記したように、日本の外国人労働者問題プロパーではない方法論とフィールドを持った研究者が多く参加し、地方に基盤を置いた研究会が母体となった本書だからこそ、このような議論の射程を一貫して持ち得たと私は感じているが、本書の問題提起を、多くの研究者が、そして多くの市民が受け止めて、さまざまな議論と実践——たとえばラチーノ学院と共生する地域のような——が生まれることを心から願っている。

#### [参考文献]

- 谷富夫『民族関係における結合と分離』ミネルヴァ書房、2002年。
- 安田浩一「ルポ 外国人「隷属」労働者」『G2』vol.17、講談社、2014年、102～127頁。
- 五十嵐泰正「「越境する労働」の見取り図」五十嵐泰正編『労働再審② 越境する労働と〈移民〉』大月書店、2010年、11～50頁。